

今様歌

續編第三集

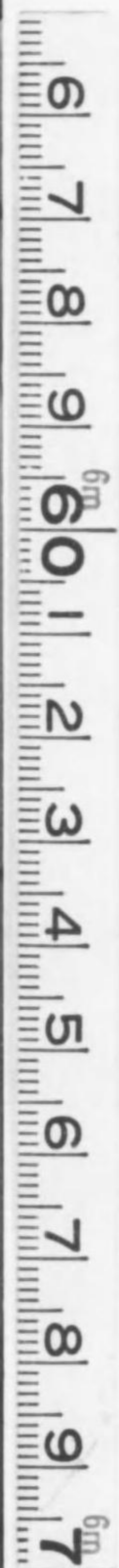
302-229



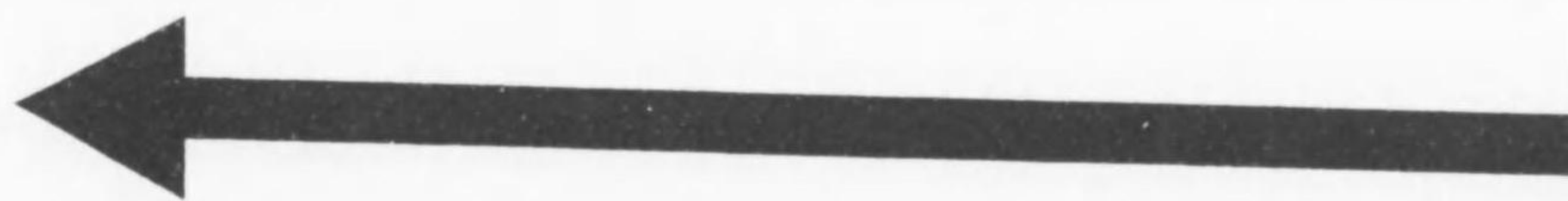
1200501367930

302

229



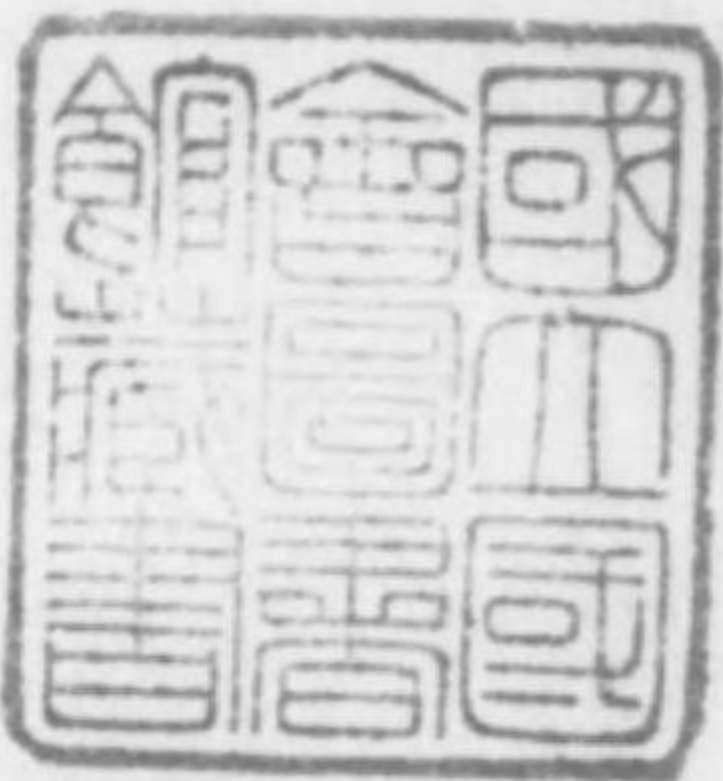
始



302
229
X

今様歌續編第三集

緒言



六月六日から七月十四日までにつつた二十四篇と本月初旬に旅行中につつた十三篇とを合せて一卷としたのである。題を出させてつたものの中にはチトふざけ過ぎたものがあるかも知れぬ。然し章魚に鉢巻をさせなかつただけでも作者は多少ひかへ目にしたのである。

昭和十二年十月二十一日萬葉集追攷の原稿をまとめて一たび措きし筆を又取上げて

南 天 莊

53.5.23
78W19841

目次

螢 四章	一頁
梅雨	二
人	三
舟	四
古傘	五
古草鞋	六
古蓑	七
芥	八
狐	九
杜鵑のおとし文	一〇
百舌の草ぐき	一一
章魚	一三

珍珠煮鮑	一四
海底時局	二章.....	一五
蛇蛻	三章.....	一六
蟬蛻	一七
蠅のむくろ	一八
南天	二章.....	一九
牛蒡	二〇
昆布	二章.....	二一
豆腐	二三
豆腐殻	二四
葛蕪	二五
雁もどき	二六
萱野三平遺蹟	二七
三島藍野陵	二九

稻荷山眺望	三一
中川村	三二
小野	三三
笠峠	三四
栗生峠	三五
周山	三六
山國陵	三七
後山國陵	三九
常照寺	四〇
廣澤池	四一
嵐山觀雨	二章.....	四二
以上三十七篇四十六章		

螢

ふるさと人よりおくり來つ、螢をあまた籠に入れて、つゆ入ちかみ
小雨ふり、ざくろの花のおつる日に
草とりかへて水ふきて、閨におかせついでぬる時、夜なかにさめて目
をやれば、おこたりもせで光るかな
あやまつ如く落つるあり、籠の内ながら飛ぶもあり、かはりがはりに
きらめけば、光のあやぞ定まらぬ
又まどろめば草の香の、たかき川べを夜ゆきて、あか衿つけたる小
人らに、とりかこまるとゆめに見つ

○ひかりのあやハ即光彩ナリ

梅 雨

ねざめの耳にはとほとと、物音するにうかがへば、あすは晴ぞとよ
ろこびて、ねし子いとほし又も雨

○ココノうかがへばハうかがひ聞けばナリ

人

みづから死なむとする人も、人のせまらば叫ぶべし、人まじはりを
せぬ人も、島にうつるはこばむべし

○以下十篇ハ人ニ題ヲ出サセテ作レルナリ

舟

龜のかわらにのりかへて、島子のすてしつり舟は、いづくの浦にか
よりにけむ、鯛もかつをも載せながら

○かめのかわらハ龜ノ甲ナリ。但古典ニ見エズ。思フニ地方ニ殘レル古言ナルベシ。
島子ハ卽浦島子ナリ。うらしまのこトモしまこトモ云ヒシナリ(萬葉集追攷参照)。萬
葉集卷九ナル詠水江浦島子歌ニ堅魚つり、鯛つりほこり、七日まで、家にも來ずて、海[?]
さかを、すぎてこぎゆくに云々トヨメリ

古傘

芥つみたる門ごとに、たたみをたたく音たかし、あやしきをのこの
背負ひたる、かごにはさめりやぶれ傘

古草鞋

いたるところにおちたりし、わらぢは見えずなりにけり、松なみ木
ある街道も、鏡のごとくみがかれて

古蓑

鳥おどしにもきすべきを、なほとや人のをしむらむ、惜みつらぬけ
ふる蓑も、百とせ経なばたからもの

○鳥おどしハかがしナリ。かがしノ義ハヤガテおどしナリ。かがやく。かがなくナド
モ脅嚇威壓ノ意ヲ含メリ。なほとやハなほあたらしとやノ略ナリ

芥

あくたの塚をくづしつつ、物をもとむるまづし人、つらさも興も我
知れり、あくたと書と異なれど

狐

きつねに似たる顔もあり、きつねに似たるさがあり、かほは一目
に知らるれど、性はたやすく知りがたし

杜鵑のおとし文

うぐひすの巢に子をうみて、羽ぐくましめしおこたりを、逢ひてわ
びむがおもなさに、拾ひて見よとのおとし文

○杜鵑が卵ヲ鶯ナドノ巢ニ生ミオトス事ハ漢籍ニモ萬葉集ノ歌ニモ見エタリ(新
考一七七三頁参照)ほととぎすのおとし文ノ事ハ徹書記ノ草根集卷十四長祿二年
五月二十四日ノ下ニ

美濃國より藤原利永、栗の葉のうつくしく巻きたるものあまたのほせ侍る。これ
はほととぎすのおとし文といふもの也と國の民共申す。かの鳥のなく時賢に
いはへて引巻くと也。中に蟲のあるも無きもありと申して登せ侍る

トアリトイフ。點ヲ批チタル一句ハ誤傳ナラム。新シキモノニテハタトヘバ曉晴翁
ノ雲錦隨筆卷三ニ

讚岐國白峯山ニ留マリシ時里人ヨリ杜鵑ノオトシ文トイフモノヲ得タルヲ見

ルニ櫻栗ナドノ葉ヲ堅ク卷キタルニテサナガラ文ノ形シタリ。思フニ養蟲ノ類
ノ其葉ノ中ニコモリタルヲ杜鵑ノ餌トセムトテ口ニ銜ミテ飛ビ行ク程地上ニ
落シタルナラム(○原文イト拙ケレバ書キ改メツ)

トイヒテ圖ヲ出シ、長サ一寸餘アリト附記セリ○おこたりハ横ちやくナリ。謝罪ノ
義ノわびノ例ハ宇治拾遺物語卷十一晴明を心みる語の事トイフ條ニさりながら
ただゆるし給はらんとわびければトアリ。おとし文ハ匿名ノ文書ヲワザト路上ナ
ドニ落シオクモノナリ。ほととぎすのおとし文ハ余モ高野山ニテ拾ヒシナリトカ
云フモノヲ一見セシ事アリ

百舌の草ぐき

沓のあたひの借あれば、ほととぎすにはあはれずと、林にもずのかくるるを、人ぞあざける草ぐきと

○杜鵑ハくつてたばらむト啼キテ鵑ノ所在ヲ尋ヌルニヨリテくつて鳥トイフ異名アリト奥義抄及綺語抄ニ見エタリ。但兩書ハ今手許ニ有ラズ。くつてたばらむハ沓の代を下さいトイフ義ナリ。もすの草ぐきハ萬葉集卷十二春さればもすの草ぐき見えずとも吾は見やらむ君があたりはトアリ。草ぐきハ草くぐりナリ。草間潜行ナリ。鵑ハ春夏ハ山ニ入りテ潤葉樹ノ林ニ隠ルルヲ古人ノ細ニ觀察シテもすの草ぐきト云ヒソメシナリ。或書ニもすの草ぐきハもすのはや贅ニ同ジト云ヘルハアサマシキ誤ナリ。はやにへノ事ハ續編第二集十一頁ニ云ヘリ

章魚

浦しまの子をなぐさむと、海つあそびをせし時に、たこぞたくみにをどりけむ、八つの足をばつまだてて

○ココノあそびハ遊燕ナリ宴會ナリ

珍味煮蛇

甲斐の國には海なきを、あはびは川に棲まぬをや、するがの海より
ふじ川を、殻に乗りてやのぼり來し

○煮蛇ハ甲斐ノ名産ナリ。毎年夏名取忠愛君ヨリ贈ラルル例ナリ

海底時局

表は右ぞひだりぞと、ひらめとかれひと争ひき、その時あたのおそ
ひ來て、しろき腹をばつかむとす
ひらめもかれひもおどろきて、腹とはらとを合すれば、右も左もく
ろくして、あたの眼をのがれけり

蛇ヘビ 蛻カサネ

いづくより来てぬぎつらむ、いつのほどにかときすてし、さくらの
枝にかかりたる、へびのもぬけの長きかな

杖のふくろによけれども、破れやすきをいかがせむ、蛇によしある
書をえば、きりて表紙にはるべきか

そはともかくもその蛇は、いづちゆきけむおぼつかな、ゆかのした
にや入りにけむ、ひそみてやある草むらに

○和名抄ニ蛇蛻一名龍子衣へみのもぬけトアリ。以下五篇ハ又人ノ出題ニ依レル
ナリ

蟬 蛻

いつくしきかなむつの脚、生けるがごとしふたつの目、時し來ぬれ
ばをしげなく、蟬はぬぎけりふるき殻

○いつくしニニ義アリ。ココナルハ儼然タルナリ。蟬蛻又蟬殻トイフ。タトヘバ顔氏
家訓ニ蟬殼蛇皮トアリ。古今集哀傷ニモうつせみはからを見つともなぐさめつ
ヨメリ

蠅のむくろ

くひものもなきへやに来て、うゑてやはへの斃れたる、書ばかりなるへやにゐて、餌にあくものは紙魚ばかり

南天

年月ながくなんてんを、そだてて知りつそのさがも、はげしき風をふせがでは、股より折れておひたたず
木の名を家に負ひたれど、我は我なり木は木なり、木はもの陰をたのむべし、我はすまはむあらしにも

牛 蒡

おほ根のごとく白からず、人參のごとあかからず、畠は母なりその
いろに、似たるごばうぞうつし眞子

○萬葉集卷十九ニむかしよりかたりつぎつる鶯のうつし眞子かもトアリ。うつし
まこハ正眞ノ子トイフ事ナリ。因ニ云ハム。牛ノ吳音ハゴナリ。牛蒡牛頭ヲごばうと
づト訓ムハ吳音ニ從ヘルナリ。午ノ誤ニアラズ

昆 布

抄きついくりに根ざしたる、ひろめを刈ると利鎌もち、ひげを亂し
てえぞ人が、浪にかづきし昔はも
あら浪さわぐこしの海、そのうみ路よりもちわたり、若狭にいたり
山こえて、都に入りしむかしはも

○京都ノ松前屋ハ數百年來ノ老舗ナリトイフ。其製造ノ刻昆布ヲ京都ヨリ毎月取
寄セテ毎朝スマシ汁ニ入レテ食フ習ナリト或人ニ語リシニ北海ノ昆布ヲ賣ル店
ノ京都ニアルガ不思議ナリト云ヒシカバ感興ココニ起リテ作レルナリ○萬葉集
卷六ナル山部赤人ノ歌ニわたの底、おきついくりに、あはび珠、さはにかづきで云々
トヨメリ。いくりハ又卷二ナル人麻呂ノ歌ニモ見エタリ。海中ノ石ナリ。ひろめハ昆
布ノ邦名ナリ。はもハ目前ニ無キモノ、タトヘバ昔ノ事ヲシノブ辭ナリ。昆布ハ古、蝦

夷地ヨリ越前ノ敦賀ニ運ビ敦賀ヨリ更ニ若狭ノ小濱ニ運ビタルヲ若狭昆布トモ
稱シテ京都ニ入レシナリトイフ

豆腐

鄙よりうつれるおい人は、かたきとうふを食ひなれて、なよなよと
せる絹ごしを、たよりなしとや思ふらむ

○以下四篇ハ田間散歩ノ時豆腐行商ノ來ルヲ見テ作レルナリ

豆腐殻

しめ木にかけて搾りてし、袋にのこるとうふがら、わび人もくひ我もくひ、豚もくふなるとうふがら

○わび人ハ貧者ナリ

菟 蕪

こなれやすきをえらむ人、とどこほるをばねがふ人、人ののぞみのかはればぞ、こんにやくも世にすてられぬ

羽根うちかはししら雲にとぶ雁にもやなぞらへし、豆腐のなかに
つら成して、麻の實などのまじれるを

○上方ニテハひりゆうづ(我故郷ナドニテハひろづ)トイフ。コレヲ飛龍頭ナド書ク
ハ擬字ニテボルトガル語 *Fallos* ノ轉訛ナリトイフ(大言海)豆腐ヲ摩リテ人參・牛蒡
麻實ナドヲ交ヘテ油ニテアゲタルモノナリ(今ハひじきヲ以テ麻實ニ代フル處ア
リ)雁もどきノもどきハまがひトイフ事ナリ(例ハ梅もどきナド)之ヲ雁もどきトイ
フハ雁ノ肉ニ似タル故ナリトカ云ヘド今ハ通行ノ語源説ニ拘ハラデ狂言綺語ニ
任セタルナリ○古今集秋上ニしら雲にはねうちかはしとぶ雁のかすさへみゆる
秋のよの月トアリ

萱野三平遺蹟

かや野の村に来てみれば、今ものこれりなが屋門、門は朽ちなむ世
ありとも、くたすな義士のたましひは

○遺蹟ハ大阪府豊能郡萱野村大字芝ニ在リ。モト西國街道ノ南側ニ沿ヒタリシ由
ナルガ今ハ府道ヨリ少シ南ニ入リタル處ニ在リ。當時ノママナルハ長屋門ノミニ
テ門ノ西ナルハ疊敷ノ一室ガ即三平重實ノ自双セシ跡ナリトイフ。三平ハ淺野長
矩ニ事アリシ後復讐ノ同盟ニ加ハリシガ辭ヲ設ケテ江戸ニ下ラムトセシニ其父
其志ヲ察シ累ヲ己ガ主大島氏(旗本)ニ及ボサムコトヲ懼レテ江戸ニ下ルコトヲ許
サザリシカバ進退ココニ窮マリテ一書ヲ山科ナル大石良雄ニ贈リテ約ニ背クコ
トヲ謝シ其夜自双セシナリ。時ニ元祿十五年正月十三日年二十八ナリキ。墓ハ部落
ノ南ナル千里山ノ半腹ニ在リテ北面セリ。碑ハ基石ヲ合セテ長七尺餘、元文五年即
三十八年後ニ嗣子長好ノ建テシモノニテ正面ノ萱野三平墓ノ五字ハ禪僧法藏寺

百拙ノ書、三面ニ刻メル誌銘ハ堀南湖ノ撰ナリ。〇くたすなハ寓らすなナリ。第三節ノ門ハ長屋門ヲ受ケタレバもんと唱フベキナレドかどト唱ヘム方歌ヒヤスシ。心ニ任セテ可ナリ

三島藍野陵

あゐ野の原のみささぎは、こころに染みてわすられじ、森のあか松色はえて、みほりの隈にほぞ鳴く

○繼體天皇ノ御陵ナリ。大阪府三島郡三島村大字太田ニ在リテ南面セリ。地ハ安威山ノ東方ノ平野ナリ。其平野ヲ古典ニ藍野又ハ藍原ト云ヘリ。御陵ハ周回九町許、環隴儼然トシテ平地ナガライト物深シ。三島郡ハ中世島上島下ノ二郡ニ分レタリキ。サテ御陵ノ所在地ハ島下郡ニテ(和名抄郷名ニモ島下郡安威トアリ)諸陵寮式ニ三島藍野陵在攝津國島上郡トアルニ叶ハザレバ今ノ藍野陵ハ外ノ御方ノ陵墓ニテ同郡高槻町大字芥川(舊芥川村)ナル今城塚ノ御陵ナラムト云ヘル人アリ。播磨風土記揖保郡大田里ノ下ニ攝津國三島賀美郡大田村トアルガ若今ノ太田ナラバ古島上郡ナリシガ後ニ島下郡ニ屬セシナラム。トモカクモ今ハ御治定ニ從フベシ。因ニ云ハム。此天皇ハ御世ノ始ニハ樟葉宮ニマシマシキ。其宮址ハ今ノ河内國北河内郡

樟葉村大字楠葉ニ在リテ淀川ヲ隔テタレド御陵ノ東々北ニ當リテ相遠カラズ(直徑二里半許)大和ノ磐余玉穗宮ニテ崩ジ給ヒシヲ懸隔シタル地ニ葬リ奉リシハ故アル事ニヤ

稻荷山眺望

手をつらねたるむら山も、えぞさへぎらぬよど河を、あふみ山しろ
ふた國の水をつどへておしすすむ

○時局ヲ思ヒテ感慨セシナリ。下瞰セシハ竹田・鳥羽・淀ノ方面ノミ。今少シ登リテ山東ヲモ眺望セマシヲ。以上三篇昭和十二年十月七日作之

中川村

路をはさめる杉ばやし、見あぐる空のせばきかな、杉や世すぎのしろならむ、田もなき谷のさと人は

○中川村ハ山城國葛野郡二村中ノ一ニテ周山街道ニ沿ヘリ。目ニ觸ルル限材木ヲ扱ハザル家ナク材木ニ杉丸太ノ外ナルハ無シ。路ニツニ岐レタル、東ニ行ケバ杉坂ナリ(續編第二集道風神社参照)

小野

京に入りしやいくそたび、かつて雨には逢はざりき、谷々にわく雲きりを、はじめて見るがめづらしさ

○小野ハ同郡小野郷村ノ大字ニテ中川村ノ西北ニ當リテ同ジク周山街道ニ沿ヘリ。山ハ悉ク杉又ハ檜ノ林ニテ處々ニ谿流見ユ。余ガ京都ノ門人ノ案内ニテ京都附近ヲ巡覽スルハ大正十一年一月以降ナリ

笠 峠

ここや丹波の國ざかひ、谷ふかくして底しらず、花背にまさるたう
げ路もみぢの頃はさぞよけむ

○山城ノ葛野郡ト丹波ノ北桑田郡トノ界ナリ。續編第二集花背峠ト對照スベシ

栗生 峠

末をば知りてその本を、しらぬがなべての世の習、おほゐの川のか
はかみを、來て見し人やいくそばく

○栗生^{栗生}峠ハ笠峠ノ西寄ノ北方ニ在リ。地圖ニハ栗尾ト記セリ。此峠ノ降口ノ左方ニ
見ユル川流イトメデタシ。名ハココニテモ大堰川又ハ桂川トイフ如シ。水源ハ大悲
山ナレド此ヨリ上ニカクメデタキ處ハアラジ。但大布施^{大布施}ト井戸トノ間ハ未知ラズ
(續編第二集大悲山及大布施參照)

周山

身を文王になぞらへて、周山城とは名づけけむ、おもひあがれる山
じろも、今は跡だになしといふ

○北桑田郡周山村大字周山ノ西方ノ山上ニ明智光秀ノ築キシ周山城ノ址アリト
イフ。おもひあがれるハ僧上なるナリ。ソノあがれるニテ山じろヲ釣出シタルナリ

山國陵

猿のみすめる山もやと、このところには來ましけむ、から木に似た
る御心も、このさくらにや春めきし

○光嚴天皇ノ御陵ナリ。北桑田郡山國村大字井戸ナル常照寺ノ長ノ山腹ニ在リテ
南面セリ。橋内正面ノ土壇ノ上ニ松椿トカヘ、デトノ生ヒタルガ即御陵ナリ。遺勅ニ
依リテワザト石塔ヲ据エズシテ樹ヲ植エタルナリトイフ。御陵ノ下ニ寺アリ。其東
端ガ御廟ニテ其前ニ櫻ノ二老樹アリ。一ヲ左近櫻トイヒ一ヲ九重櫻トイフ。後者ハ
垂絲ニテ法皇ノ御遺愛ナリトイフ。御廟ノ西南ニ方丈アリテ其前ニモ櫻樹アリ。此
物最大ナリ。太平記卷三十九に

光嚴院禪定法皇ハ正平七年(○十二年ノ誤)ノ比南山賀名生ノ奥ヨリ楚ノ囚ヲ赦
サレサセ給ヒテ都へ還御成タリシ後、伏見里ノ奥光嚴院ト聞エシ幽閑ノ
地ニゾ住セ給ヒケル、中使頻ニ到テ松風ノ夢ヲ破リ舊臣常ニ參テ蘿月ノ

寂ヲ妨ケル程ニ此モ今ハ住ウシト思召、丹波國山國ト云所ヘ跡ヲ銷テ移ラセ給
ヒケル

トアリ。カクテ同十九年七月七日ニ御年五十二ニテ崩ジ給ヒキ。○山もやとハ山も
やあるとノ略ナリ。から木ハ枯木ナリ。下ヘツヅク時ハれガニ轉ズルナリ

後山國陵

悲田院よりうつらして、はじめて御目の合ひし時、その後の世のあ
りさまを、きこえましけむ嘆きつつ

○後花園天皇ノ御陵ナリ。山國陵同城ノ西側ニ東面シテ二基ノ小サキ寶篋印塔ヲ
据エタルガ御陵ナリトイフ。天皇ハ平素ヨリ御高祖父光嚴天皇ヲ欽慕シタマヒ、朕
ノ灰骨ヲ收メテ之ヲ常照寺ノ祖堂ニ安置セヨト遺命シタマヒシカバ御火葬所悲
田院ヨリ後ニ此處ニ移シ奉リシナリ。悲田院ハ古ノ悲田院ノ跡ニ建テタル寺ニテ
鴨川ノ西、三條ノ北ニ在リキトイフ。天皇ハ御讓位後彼應仁ノ亂ニ遭ヒ給ヒキ

常照寺

いましし世とはこよなきを、なほすみうしと僧のいふ、さこそは霧のふかからめ、軒にさがれり苔たるひ

○常照寺ハ臨濟宗天龍寺派ノ大寺ナリ。光嚴法皇ノ御開基ナリトイフ。法皇ノ此處ニ住ミ給ヒシ始ハ無論庵室ニ過ギザリケム。サテ寺傳ノ如ク正平十七年ニ此寺ヲ開キタマフトモ初ヨリ今ノ如ク宏壯ニハアラザルベシ。ソテ思ハバ不滿モ起ルマジキニ近クモ住ミカネテ出奔セシ住持アリトイフ。サテ縁ニ立出デテ林泉ニ矚目スルホド北ノ軒端ニ長ク物ノ懸レルヲ何ゾト見レバ苔ノ異常ニ生長シテ懸氷ノ如ク成レルナリキ。○こよなきにハ格別にまされるにトナリ

廣澤池

蘆もまこも刈りはてて、にほのうき巢はあともなし、車よくやれ
よくせざば、池の底にぞしづみなむ

廣澤池ノ南岸ハ嵯峨ニ到ル道路ニ沿ヘリ。此池ニハ初夏ノ頃所謂にほのうき巢見ユトイフ。ニホノ浮巢ヲ歌ニヨメルハ勅撰集ニテハ新千載集ガ始ナリ。即下にのみかよひしものをいかにして鳩の浮巢のうき名たつらむ、水の上に鳩の浮巢のうきながら住めばすまるあはれ世中(法皇御製)はかなしや風にただよふ波の上にはほのうき巢のさても世にふるト見エタリ。新千載集ハ北朝後光嚴天皇ノ御世ニ成リシモノニテ法皇トアルハ光嚴天皇ノ御事ナリ

嵐山觀雨

花みる山のふもとなる、茶屋に入りてぞ雨をみる、いづれの茶屋にも客ぞなき、雨を見にくる人やなき

雨のけしきのかしきは、おしはかるべしいはずとも、雨みるこころち語らむか、暗くて寒くていにたくて

マダ時間ガ早ウゴワスヨツテ嵐山ノ雨景色ヲ見テ歸リマシヨウカト人ノ云ヒシニヨリテ鳴瀧附近ヨリ車ヲ右ニ向ケシナリ。以上十篇昭和十二年十月八日作之

昭和十二年十二月一日印刷
昭和十二年十二月五日發行

今様歌集付 【非賣品】

著者 井上通泰

發行所 東京市下谷區御徒町二ノ七八
石野觀山

印刷所 東京市下谷區御徒町二ノ七八
福壽堂印刷所
電話 下谷四三五番

(印刷二百二十五部)

終